大江健三郎
全作品
1

新潮社

大江健三郎全作品 1
一九六六年六月二五日発行
一九七〇年一〇月三〇日九刷
著者大江健三郎
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話東京(03)二六〇局一一一一
振替東京八〇八
大日本印刷、大口製本
定価四八〇円

©1966 Kenzaburo Oe
Printed in Japan
〈第二回配本〉

乱丁本はお取替えします

大江健三郎全作品1目次

奇妙な仕事 5
死者の奢り 19
他人の足 49
偽証の時 65
飼育 99
人間の羊 139
運搬 157
鳩 171
芽むしり 仔撃ち 199 長編小説
見るまえに跳べ 317
本当に文学が選ばれねばならないか？ 361
年譜 377

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大江健三郎全作品 1

奇妙な仕事

附属病院の前の広い鋪道を時計台へ向って歩いて行くと急に視界の展ける十字路で、若い街路樹のしなやかな梢の連りの向うに建築中の建物の鉄骨がぎしぎし空に突きたっているあたりから数知れない犬の吠え声が聞えて来た。風の向きが変るたびに犬の声はひどく激しく盛上り、空へひしめきながらのぼって行くようだったり、遠くで執拗に反響しつづけているようだったりした。

僕は大学への行き帰りにその鋪道を前屈みに歩きながら、十字路へ来るたびに耳を澄した。僕は心の隅で犬の声を期待していたが、まったく聞えない時もあった。どちらにしても僕はそれらの声をあげる犬の群れに深い関心を持っていたわけではなかった。

しかし三月の終りに、学校の掲示板でアルバイト募集の広告を見てから、それらの犬の声は濡れた布のようにしっかり僕の躰にまといつき、僕の生活に入りこんで来たのだ。

病院の受附では、そのアルバイト募集については全く関係していないということだった。僕は守衛にしつこく訊ねて、木造の倉庫が残っていたりする、病院の裏へ入って行った。その倉庫の一つの前で女子学生と私大生とが、中年の、長靴をはいた顔色の悪い男から説明を受けていた。僕は私大生のうしろに立った。男は僕を瞼の厚い眼で見つめ、軽くうなずいて説明をくりかえした。

犬を一五〇匹殺します。と男はいった。専門の犬殺しが一人向うで準備していますが、明日から三日ほどで処理していただく。

病院で実験用に飼っていた一五〇匹の犬を英国人の女が残酷だということで新聞に投書し、それらの犬を飼いつづける予算も病院にはないので一度に殺してしまうことになり、その男が犬の処分を引受けた。皆さんも解剖のことや犬の習性についてや、いろいろ勉強にもなることですから。

男が服装や時間の注意をして病院へ入って行くと僕らは肩をならべて学校の裏門の方へ歩いた。

ペイはずいぶん良いわね、と女子学生がいった。

君は引受けるつもり？　と驚いて私大生が訊ねた。

引受けるわ、私は生物をやっているんだし、動物の死体には慣れてるわ。

僕も引受ける、と私大生がいった。
僕は十字路で立ちどまり耳を澄ませたが犬の声は聞えなかった。街路樹の葉を落した枝を夕暮れの風が口笛のような音をたてて渡っていた。駈けて二人に追いつくと私大生が僕を詰問するように見つめた。
僕も引受けるよ、と僕はいった。
翌朝、僕は草色の作業ズボンをはいて出かけていった。犬殺しは三十歳くらいの背の低い、しかし逞しい筋肉の男だった。倉庫前に作られた囲いの中へ僕が犬を引いて行き、犬殺しが殺して皮を剥いだ死体を私大生が運び出して男に渡した。女子学生は皮の整理をした。仕事は捗どって朝のうちに十五匹を処理した。僕はすぐ仕事に慣れた。
犬置場はコンクリートの低い塀に囲まれた広場だった。一メートルごとに打った杭の列に犬が一匹ずつ結びつけられていた。犬はおとなしかった。一年近くそこで飼われているうちに敵意をかきたてる習慣をなくしてしまったように、僕が塀の中へ入って行っても吠えなかった。病院の事務員の話によると犬たちはこれという理由もなく突然吠えはじめ、それがすっかり静まるまでには二時間かかるが、外から塀の中へ入って行くくらいでは吠えないのだそうだった。犬たちは吠えなかったが僕が入って行くと一勢にこちらを見た。一五〇匹の犬に一斉に見つめられるのは奇妙な感じだった。三百の脂色の曇りのある犬の眼に映っている三百の僕の小さいイマージュ、と僕は考えた。それは小さい身震いを僕に感じさせた。
犬たちは極めて雑然としていた。ほとんどあらゆる種類の犬の雑種がいた。しかし、それらの犬は互いにひどく似かよっていた。大型の犬や小型の愛玩用の犬、それにたいていは中型の赤犬が杭につながれていたが、それらは互いに似かよっていた。どこが似ているのだろうな、と僕は思った。全部、けちな雑種で痩せているというところか。杭につながれて敵意をすっかりなくしているというところか。きっとそうだろうな。僕らだってそういうことになるかもしれないぞ。すっかり敵意をなくして無気力につながれている、互いに似かよって、個性をなくした、あいまいな僕ら、僕ら日本の学生。しかし僕はあまり政治的な興味を持ってはいなかった。僕は政治をふくめてほとんどあらゆることに熱中するには若すぎるか年をとりすぎていた。僕は廿歳だった。僕は奇妙な年齢にいたし疲れすぎてもいた。僕は犬の群れにもすぐ興味をなくした。
しかし、スピッツとセパードの混血としか思えない不思議な犬を見つけた時は、おかしさが虫のように躰中を走り

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

まわった。犬はセパードの頭をし、白い毛をふさふさ、暖かい風になぶられていた。僕は声をあげて笑った。

こいつをごらんよ、と僕は私大生にいった。スピッツとセパードが交尾している恰好はひどくおかしいよ、きっと。

私大生はむっと唇をとがらせて顔をそむけた。僕はそのあいまいな中型犬に運び紐をとりつけて塀から引きだした。

犬殺しが棒をさげて待っている板囲いの中へ犬を引っぱって僕は入って行く。背にすばやく棒を隠して犬殺しはなにげなく近づいて来、僕が紐をもったまま充分に距離を犬からあけると、さっと棒を振りおろし、犬は高く啼いて倒れた。それは息がつまるほど卑劣なやりかただった。腰の革帯から抜きとった広い庖丁を犬の喉にさしこみ、バケツへ血を流してから、あざやかな手なみで皮を剥ぎとる犬殺しを見ながら僕は生あたたかい犬の血の臭いと特殊な感情の動揺とを感じた。

なんという卑劣さだろう。しかし今、眼の前で犬を処理している男の機能的な卑劣さ、すばやく行動化された卑劣さは、すでに非難されるべきではないと思われた。それは生活意識の根底で極めて場所をえている卑劣さだった。僕はあまり激しい怒りを感じない習慣になっていた。僕の疲れは日常的だったし、犬殺しの卑劣さに対しても怒りはふくれあがらなかった。怒りは育ちかけ、すぐ萎えた。僕は友人たちの学生運動に参加することができなかった。それは政治に興味を持たないこともあるが、結局、持続的な怒りを僕が持ちえなくなっているせいだった。僕はそのことを時々、ひどく苛だたしい感情で思ってもみるが、怒りを回復するためにはいつも疲れすぎていた。

まっ白く皮を剥がれた、こぢんまりしてつつましい犬の死体を僕は揃えた後足を持ちあげて囲いの外へ出て行く。犬は暖かい匂いをたて、犬の筋肉は僕の掌の中で、跳込台の上の水泳選手のそれのように勢よく収縮した。囲いの外で私大生が待ってい、彼は受けとった犬の死体が自分の躰に触れないように注意しながら運んで行く。そして僕は死んだ犬から外した運び紐をさげて新しい犬をつれ出しに行くのだ。

しかし五匹めごとに犬殺しは囲いから出て来て一服し僕は土にじかに腰を下した彼の周りを歩きながら彼と話した。立ちどまると犬殺しの躰からはやはり生あたたかい犬の臭いがし、それは犬の死体そのものよりもっと生なましかったから僕は何げなく顔をそむけながら歩きまわった。

女子学生は囲いの中で毛皮を整理していた。ひどく血に汚れた皮は水洗場で洗いおとすのだ。

俺に毒を使えとすすめるやつがいるんだ、と犬殺しはいった。

毒を？

そうなんだ、俺はしかし毒は使わない。毒で犬を殺す間、日陰でお茶を飲んでいるようなことを俺はしたくない。犬を殺す以上は、犬の前に棒をもって立ちふさがらなくちゃ本当でないだろう。俺は子供の時からこの棒でやって来たんだ。犬を殺すのに毒を使うような汚いまねはできない。

そうだろうなあ、と僕はいった。

それに、毒を使うとね、死んだ犬が厭な臭いをたてるんだ。犬には良い匂いをたてて、湯気をあげながら皮を剥かれる権利があるとは思わないか。

僕は笑った。

そうだ、その権利があるんだ、と犬殺しはまじめにいった。俺は毒つかいどもとは訳がちがう。俺は犬を好きだからな。

洗うための毛皮をさげて女子学生が出て来た。彼女の厚ぼったく血色の悪い皮膚は青いままで上気していた。血に濡れ、厚く脂のついた毛皮は重く、ごわごわしていた。それは濡れた外套のように重かった。僕は女子学生が水洗場へ運ぶのを手つだった。

あの男にはね、と毛皮をさげて歩きながら女子学生はいった。伝統意識のようなものがあるわ。棒で殺すことに誇りを持っているのね。それが生活の意味なのよ。

あの男の文化だ、と僕はいった。

犬殺し文化ね、と感情のない声で女子学生はいった。似たりよったりだわ。

え？　なにが。

生活の中の文化意識、と女子学生はいった。桶屋の技術が桶屋の文化だ、そういう文化が生活としっかり結びついた本当の文化だ、というようなことを評論家が書くでしょう。あたりまえなことでね。ところが、一つ一つ実例をあたってみるとね、そんなにきれいごとじゃないのよ。犬殺しの文化、淫売の文化、会社重役の文化。汚らしくて、じめじめして根強く、似たりよったりよ。

ひどく絶望したものだな、と僕はいった。

絶望しているわけでもないのよ、と女子学生は意地悪な眼で僕を見かえしながらいった。こうして犬の毛皮を水で洗う仕事だってするしね。脚気の新薬も飲んでいるし。

その厭らしい文化に足をつっこもうとしているの？
足をつっこむとかなんとかいうのじゃなくてね、もうみんな首までとっぷりつかっているのよ。伝統的な文化の泥で泥まみれなのよ。簡単に洗うことはできないわ。
僕らは水洗場のコンクリート床へ皮を投げだした。掌が強く臭った。
ほら、と女子学生は屈みこんで浮腫んだふくらはぎを指の腹で押して見せた。青黒い窪みができ、それはゆっくり回復したが、もとどおりにはならなかった。
ひどいでしょ、いつもこうなのよ。
たいへんだな、と眼をそむけて僕はいった。
女子学生が毛皮を洗う間、僕はコンクリートの台に腰をかけて芝生でテニスをしている看護婦たちを見た。看護婦たちは球を打ち損じるか、躰を丸くして笑うかしていた。
私はね、ペイをもらったら火山を見に行くわ、と女子学生がいった。貯金してあるのよ。
火山を見に？　と僕は気のない返事をした。
火山はおかしいなあ、と女子学生はいい、静かな声で笑った。彼女は疲れきった眼をしていた。水に両掌をひたしたまま彼女は空を見あげていた。
君はあまり笑わないね、と僕はいった。

ええ、私のような性格だと笑うことはあまりないのよ。子供の時だって笑わなかったわ。それで、時々、笑いかたを忘れたような気がするとね、火山のことを考えて涙を流して笑ったわ。巨きい山のまん中に穴があいていてそこからむくむく煙が出ているなんて、おかしいなあ。女子学生は肩を波うたせて笑った。
君はお金をもらったらすぐ行くの？
ええ、とんで行くわ。山に登りながらおかしくて死にそうだと思うわ。
僕は台の上で不安定な躰を支えながら寝て、空を見上げた。雲が魚のように光り陽がまぶしかった。陽よけにかざした掌が生ぐさく臭った。僕の躰のすみずみまで犬の臭みがしみこんでいる、と僕は思った。犬を廿匹殺した後の僕の掌は耳をなでるためにしか犬に触れなかった僕の掌とはちがう。
僕は仔犬を買おうかな、と僕はいった。
え？
雑種のとてもけちな赤犬を買うよ。その犬はね、一五〇匹の犬の怨みを全身に背負うということになるんだ。顔が歪むほど僻んだ厭な犬になるだろうな。
僕は笑ったが女子学生は唇を硬く噛みしめていた。

私たちはとても厭らしいわ、と女子学生はいった。
僕らは倉庫の前へ帰って行った。犬殺しと病院の事務員が話していた。その傍で私大生が熱心に話を聞いていた。
でも、病院にはその予算がありませんよ、と事務員がいった。私たちの病院からはもう犬は関係がなくなったんだし、飼育係は他の仕事に今日から移りました。
でも今日処理が終ることにはならないよ、と犬殺しはいった。
昨日までで、犬の飼育は終りです。
飢えさせておくのか、と苛立って犬殺しがいった。
病院の残飯をやっていたんで、飼育係さえいたらね、飢えさせるということにもならないだろうけど。
俺が餌を作るよ、と犬殺しがいった。残飯はもらえるね。
いいですよ、残飯置場を見ますか。
今ちょっと見ておこう。後で俺が犬に配るから。
私も手つだうわ、と女子学生がいった。
よせ、と激した声で私大生がいった。
犬殺しも事務員もおどろいて私大生の赤らんだ顔を見た。
よせ、そんな恥しらずなことはよせ。
え？　と当惑して犬殺しがいった。
明後日までには全部殺してしまうんだろう？　それに餌をやって手なずけるなんて卑劣で恥しらずだ。僕はすぐに殴り殺される犬が、尾を振りながら残飯を食べることを考えるとやりきれないんだ。
今日はせいぜい五十匹しか殺さないんだ、と犬殺しが怒りを押さえた声でいった。後の百匹を飢えさせておくのか。そんな残酷なことはできないよ。
残酷な、と私大生は驚いていった。残酷なだなんて。
そうだ、残酷なことを俺はしたくないんだ。俺は犬を可愛がっている。
犬殺しは事務員と倉庫の間の暗い通路へ入って行った。私大生はぐったりして囲いにもたれた。彼のズボンは犬の血に汚れていた。
残酷なだなんて、あいつはどうかしてるよ、と私大生はいった。あいつのやり方は卑劣だな。
女子学生は冷淡に地面を見下して黙っていた。地面には犬の血の濃緑色に光る汚点があった。それは駱駝の頭の形をしていた。
え？　卑劣だとは思わないかい。
そうだろうな、と僕は投げやりにいった。

私大生は蹲みこみ眼をふせて暗い声でいった。僕はあの犬たちが低い壁に囲まれてじっとしていると考えるとやり切れないんだ。僕らは壁の向うを見ることができる。あいつたちには見えない。そしてあいつたちは殺されるのを待っているんだ。

壁の向うが見えたところでどうにもならないわ、と女子学生がいった。

そうなんだ。そのどうにもならない、ということが僕にはやりきれない。どうにもならない立場にいて、しかも尾を振りながら餌を食べているんだ。

彼らは私大生をもてあましていた。僕は運び紐をぐるぐる振りまわしながら次の犬を引き出しにいった。今度は一番巨きくて耳のたれたやつにしよう、と僕は考えた。

夕暮になり五十匹目の犬の処理が終ると僕らは水洗場へ躰を洗いに行った。犬殺しは洗い終った毛皮を丁寧にそろえて縄でしばっていた。犬の処理を病院から請けおった男もやって来た。僕らは手や足を洗い終って犬殺しの仕事を見まもっていた。

犬の死体はどうしてるんです、と私大生が訊ねた。

あすこで、ほら、焼いているんだ、と男はいった。

僕らは死体焼却場の巨きい煙突を見上げた。そこから淡い桃色がかった柔かな色の煙が空へ上っていた。

でも、あすこは人間の死体を焼くためでしょう？　と私大生がいった。

犬殺しが振りかえって鋭い眼で私大生を見つめた。

え？　犬の死体と人間の死体と、どうちがうんだ。

私大生はうつむいて黙っていた。僕は彼の肩が小刻みに震えているのを見た。ひどく苛立っているんだな。

やはり、ちがうわね、と女子学生が煙突を見上げたままいった。

誰も答えなかった。少し間がぬけるほど後で、え？　と僕がいった。

煙の色がちがうのよ。ふだん人間を焼いている時より少し赤みがかって優しい色だわ。

赤ら顔の大男の死体を焼いているのかもしれないよ、と僕はいった。

犬にきまってるわ。もっとも夕焼のせいであんなに良い色をしているのかもしれないけど。

僕らはまた黙って煙を見上げた。犬殺しは束にした犬の毛皮をかつぎ上げた。夕焼けた空を背にして彼は黒々と逞しかった。

明日は良い仕事になりそうだな、と満足して犬殺しはい

った。え？　良い日だよ、明日は。
翌日はよく晴れた良い日だった。犬の処理を請けおった男は来なかったが作業は順調に進行し、予定の三分の二が午前中に終った。僕らは疲れていたが比較的、陽気だった。ただ、私大生だけが苛々して不機嫌だった。彼はズボンの汚れを気にしていたし、犬の臭いが昨夜風呂に入った後もまだ躰中に残っていた、と不平がましくいっていた。爪の間に犬の血がこびりついてとれないんだ。それに石鹸でどんなにこすっても犬の臭いがとれない。
僕は生気のない私大生の掌を見た。細い指の先で爪は伸びて汚れていた。
あなたがこの仕事を引受けたのは失敗ね、女子学生がいった。
そんなことじゃないんだ、とますます苛立って私大生はいった。僕が引受けなかったとしても僕の代りにこの仕事をやる男の爪にはやはり犬の血がこびりついて離れないし、そいつの躰中は生なましく臭うんだ。僕はそれがやりきれないんだ。
あなたはユマニストね、と味けない声で女子学生はいった。
私大生は血ばしった眼を伏せて黙っていた。
私大生は次第に苛立って行った。そして犬殺しが話しかけても満足にうけ答えしなかった。犬殺しは気を悪くしていた。
僕がセッター風の雑種の犬を連び紐で引いて来ると犬殺しは囲いから出て煙草を飲んでいた。少し離れて私大生は犬殺しに頑固に背を向けて立っていた。
僕は犬を連れて散歩でもしているように犬殺しに近づいて行った。
そこへつないどきな、と犬殺しがいった。
僕は囲いの入口の杭に連び紐を結んだ。
ここの犬はどれもおとなしいな、と犬殺しは退屈した声でいった。仔牛ほどの大きさでひどく獰猛なのがどこでも一匹ぐらい、いるものなんだがな。
そういう犬はやりにくいだろうな、と僕は欠伸をかみ殺して眼に涙をためながらいった。暴れられると。
そういうのは、とやはり欠伸をかみ殺しながら、うるんだ眼で犬殺しはいった。おとなしくする方法があるんだ。こんなにして。
犬殺しはゆるめた革帯の間から関節に毛の荒々しく生えた掌を押しこもうとした。
よしてくれ、と私大生が叫んだ。そういう卑劣で厭らし

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com